様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２８３０

研究課題名（和文）乳児期から老年期までの「メディア情報リテラシー生涯発達理論」の構築と実践研究

研究課題名（英文）Construction and Practical Research of the " Lifelong Developmental Theory of Media and Information Literacy " from Infancy to Late Adulthood

研究代表者
駒谷　真美（KOMAYA, Mami）

実践女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：２０４１３１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、まず乳児期から老年期まで生涯発達の観点からエリクソンの心理社会的発達理論を参照し、社会情動的スキルを取り入れ、教育文脈から「メディア情報リテラシー(MIL)生涯発達理論」を世界で初めて体系的に構築した。次にコロナ禍の状況に応じて、児童期・思春期・青年期・成人期・老人期でメディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」4者の関係性から学ぶ「はじめての動画づくり」ワークショップを実践した。その結果、各時期に設定したMIL発達課題の妥当性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義としては、世界で初めてメディア情報リテラシー（MIL）生涯発達理論を構築したこと、そしてMILの発達課題に則したワークショップを実践したことである。理論と実践の均衡性ある研究を創造した。社会的意義としては、メディアが発信する情報は膨大かつ玉石混合であり、フェイクニュースやデマが氾濫している昨今において、メディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」4者の関係性を体験できるワークショップを実施したことである。メディアの利便性を実感しつつ、各発達段階で情報弱者に陥りやすい危険性も疑似体験できたことは有意義であった。

研究成果の概要（英文）：This study constructed the world's first " Lifelong Developmental Theory of Media and Information Literacy " from infancy to late adulthood, referring to UNESCO’s Media and Information Literacy, Erikson’s psychosocial developmental theory, and the OECD’s social and emotional skills.
As a practical research, the workshops “Enjoy making your first SNS video!” were implemented to learn basic MIL from four viewpoints: the receiver, the user, the creator, and the transmitter based on the MIL developmental stages. The 8 workshops for childhood, adolescence, youth, adulthood, and late adulthood were conducted in face-to-face, online and hybrid formats depending on the circumstances of the COVID-19. The results suggested the validity of the MIL developmental tasks set for each period.

研究分野：メディア心理学・教育工学・人文社会情報学

キーワード：メディア情報リテラシー　生涯発達理論　乳幼児期から老年期まで　ワークショップ実践　エリクソンの心理社会的発達理論　OECDの社会情動的スキル　メディア心理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

1．研究開始当初の背景

メディア情報リテラシー（Media and Information Literacy，MIL，図１参照）研究について、先行研究を概観すると、理論は国内外の歴史的系譜や社会文化的文脈において定義の総括がなされており、実践では学校現場でのカリキュラム・教材・教員研修の定石から最新の ICT 教育まで校種ごとにショートレンジで行われていた。発達研究では各発達段階におけるメディアの心理学的影響が主であった。本研究代表者（Komaya,2020，図２参照）を含め、実践的研究が多く培われてきた。

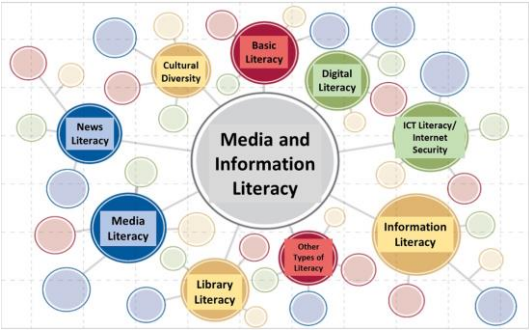

図１ UNESCO が提唱した MIL の複合的概念

（UNESCO，2013）.

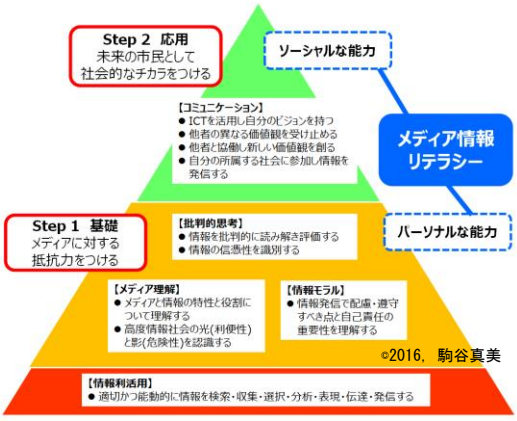

図２「MIL 育成」フレームワーク

EU のメディアリテラシー評価基準(Tornero & Pi，2013)・
情報リテラシーのガイドライン(私立大学情報教育協会，2012)・
情報活用の実践力(永野ら，2001）の観点を加え、駒谷が構築

しかし実際にメディアに関わる諸問題は、場所や老若男女を問わず存在している。例えば「乳児期から幼児期にかけて子どもたちは、ペアレンタルコントロールなしで無防備にスマホを玩具化している」「成人期の保護者はデジタルネイティブであるが MIL は未熟であり、ソーシャルネイティブの児童期や思春期の子どもにどのように教育すべきかを困惑している」「老年期の人々は、新聞やラジオなどアナログメディアに高い親和性があり、最新メディアに対してはテクノフォビアが顕著になる」「老年期は MIL の欠如から情報弱者になる危険性が潜んでいる」などである。そこでこれらの問題を根本的に解決するには、MIL 本来の定義が示す「万人」「生涯」の視点が必須であり、「MIL 教育は全ての発達段階で行われるべきではないか」という問題意識が芽生え、本研究の端緒になった。

2．研究の目的

本研究は理論と実践の２部構成をとるため、其々の目的を持つ。第１段階の目的として、乳児期から老年期まで生涯発達の観点から「MIL 生涯発達理論」を世界で初めて体系的に構築する。第２段階では、「MIL 生涯発達理論」に基づき設定した MIL 発達課題を達成するため、メディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」4 者の関係性を体験できるワークショップを実践する。

3．研究の方法

(1) 理論構築の方法

第１段階の「MIL 生涯発達理論」の構築には、次の２領域の理論を礎石に据える。まず発達心理学の観点から、Erikson の心理社会的発達理論を典拠とする。この理論では、人の一生を８つの発達段階に区分し、段階ごとにクリアすべき発達課題（○○ vs.△△）・その障害となるもの、課題達成により得られる徳について明文化されている(Erikson，1959，図３)。人が誕生から死に至るまで発達し続ける存在と捉えるスタンスは、MIL も生涯発達する本理論の視座と合致する。よって MIL 発達課題を設定するため、乳児期から老年期まで８段階の発達課題を参照する。

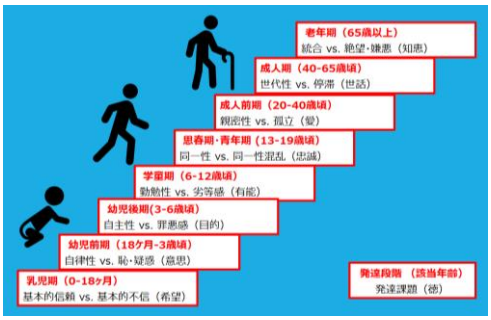

図３ Erikson の心理社会的発達理論

（Erikson，1959，駒谷が訳出）

続いて教育学の視点から、OECD の社会情動的スキルを第二の拠り所とする。このスキルは昨今注目され、発達段階に応じて目標を達成したり他者と協働したり情動を制御したりする高次に変容や発展する能力を指す（OECD，ベネッセ教育総合研究所,2015，図４)。この能力は、メディアテクストを主体的かつ批判的に読み解いていく MIL と同じ根幹をなしている。範疇として MIL は社会情動的スキルに含有される。そこで MIL を社会情動的スキルの枠組みと関連づけ巨視的視点で捉えなおす。

図４ 社会情動的スキルの枠組み

（OECD,ベネッセ教育総合研究所訳，2015）

本研究では、Erikson の心理社会的発達理論と OECD の社会情動的スキルをプラットフォームとし、本研究代表者の「MIL 育成」フレームワーク（図 2）を適合させ、「MIL 生涯発達理論」に発展させる。

(2) ワークショップ（WS）実践の方法

第 1 段階で構築した「MIL 生涯発達理論」を元に、第 2 段階では、次の方法で発達段階ごとに WS 実践を遂行する。「はじめての動画づくり」WS と称して、動画初心者を対象に「企画・撮影・編集・発信」のプロセスを各発達段階に適合したプログラムに構成し、各発達段階の MIL 生涯発達課題との整合性を検証する。

具体的には、プロの動画クリエイターの指導のもと、スマホで手軽に作れるショート動画の制作から SNS 公開まで、メディアの受け手・使い手・作り手・送り手の一貫した活動を体験し、自ら作り出す情報のメリット・デメリットについて考える機会を提供する。WS は、企画・撮影・編集・発表の 4 段階プロセスをアクティビティとして構成されている。WS 中は事前研修を受けた複数の大学生がファシリテーターとして参加者を支援する。

本学の研究倫理規定に基づき、WS 参加者には WS の概略とプライバシー保護について「事前案内」の文書にして伝え、撮影やインタビューは承諾書を得られた参加者たちに限定する。

WS は基本的に前述の 4 アクティビティを行うが、回を重ねるごとに難易度・習熟度・理解度を深めるスパイラルデザインにしている。グーグルフォームによる事前アンケートでは、メディア使用時間・メディア必要度・信頼度・情報タイプ・ネットの信頼関係・自己評価感情尺度を尋ね、参加者の実態把握と WS のディテールに反映させる。事後アンケートでは、WS 終了後の感想（MIL 関連項目も含有）を聞く。WS の始終はビデオ録画し、WS 終了後にインタビューする。アンケートの数値化データは、SPSS で量的分析を行い、自由記述とビデオ録画・インタビュー・動画作品はテープ起こしを行い、KH Coder で質的分析を行う。

4. 研究成果

(1) 理論構築の成果

第 1 段階における成果は、「MIL 生涯発達理論」を構築した点である。表 1 に示すように、乳児期から老年期まで一生涯を網羅した発達段階・MIL 生涯発達の課題は、Erikson の心理社会的発達課題と OECD の社会情動的スキルに依拠し、世界で初めて「MIL 生涯発達理論」を創出した。

表 1「MIL 生涯発達理論」

発達段階	MIL生涯発達の課題
乳児期（0歳～1歳未満）	五感による自己欲求に基づく情報感知
幼児期（1歳～5歳頃）	自己中心性に基づく情報探索
児童期（6歳～12歳頃）	主体的かつ批判的視点に基づく情報獲得
思春期（13歳～20歳頃）	アイデンティティの葛藤に基づく協調的情報探索
青年期（20歳～25歳頃）	コミットメントの深化に基づく情報共有
成人期（20代後半～30代頃）	自己・他者・社会のニーズに基づく情報獲得と共有
中年期（40代～60代前半頃）	認知的不協和との対峙に基づく情報行動や認知の変化
老年期（60代後半以上）	MILの蓄積に基づく情報格差払拭

©2024, 駒谷真美

「MIL 生涯発達理論」の摘要は以下になる。

① 乳児期

MIL 生涯発達の起点である乳児期では、五感を徐々に使いながら、社会情動的スキルにおける「目標への情熱」の萌芽として、自己意識的情動が発現する。乳児期の MIL は、Erikson の発達課題である「基本的信頼」を寄せる養育者を介し、自らの五感を頼りにメディアに接触し自分が欲する情報を感知する術を会得し始める。

② 幼児期

幼児期前半は、自己中心的な考えや行動が出現するのに呼応して、メディアの中の空想の世界と現実が物理的につながっていると感じる「マジックウィンドウ」を、強い「意思」で信じている。幼児期後半になると、「心の理論」と関連して他者の心と行動の関係を理解し始めることで、社会情動的スキルの「他者との協働」の次段階となり、メディアの中の空想と現実の違いにも気づきはじめる。Erikson の発達課題である「自主性」の発達に伴い、メディアが伝える情報を「目的」持って自分なりに理解しはじめる。

③ 児童期
児童期前半は、幼児期の「マジックウィンドウ」が持続しているため、メディアが伝える情報の理解と判断は主観的で途上である。児童期後半になると、抽象的思考や客観的視点を持ちはじめるのと連動して、メディアは「現実」を伝えていることがわかりはじめ「アダルトディスカウント」への移行が始まる。Erikson の発達課題である「勤勉性」と社会情動的スキルの「目標の達成」の忍耐力が備わることで、メディアから受け取る情報を鵜呑みにせずに、根気強くコンテンツを読み解く姿勢につながる。
④ 思春期
思春期は、Erikson の発達課題である「自己同一性」を画策しながら、仲間意識を高めるため協調的に情報探索して発達していく。身近な仲間集団の中で友人から期待される役割を行いつつ、SNS を通して仲間を評価しその結果に敏感になっている。社会情動的スキルの「自尊心」や「自信」を持つことが、SNS の世界で境界を乗り越えるレジリエンスを培い、ストレス反応からの回復につながる。
⑤ 青年期
青年期は、Erikson の発達課題である「同一性」が思春期から継続されつつ、人々が活発な情報協調行動を通して社会の効率化を図る「ソーシャル・キャピタル」でネットワークのつながりを深めることにより、豊かな社会的信頼関係を成立でき、社会情動的スキルの「社交性」につながっていく。重要な他者からの肯定的な期待が動機となり、メディアによる情報について、個人のみならず所属する集団や社会にとって有益なものを取捨選択し共有していくようになる。
⑥ 成人期
成人期の MIL は、社会に対する自己関与を模索しながら、ライフイベントに関わるニーズを見極め、獲得した情報をメディアコミュニケーションで他者と共有したり社会に寄与したりして発達していく。成人期では、Erikson の思春期・青年期の発達課題であった「同一性」の獲得により、自己肯定感が保持される。ひいては、大切な他者と相互的に友情や愛情関係を築け「親密性」が持続できる。これは、社会情動的スキルの「社交性」の高次段階でもある。
⑦ 中年期
中年期の MIL は、積年のメディア情報により認知的不協和を誘発し「停滞」の悪循環に陥りやすい反面、次世代のケアのため自律的にメディアコミュニケーションを発達していく。Erikson の発達課題である「世話」の過程で若い世代と関わるため、新しいメディアや情報と接触する機会も増加する。メディアコミュニケーションを通して「世話」を行う達成感が生じ、社会情動的スキルの「自信」となる。
⑧ 老年期
老年期は、長年慣れ親しんだ旧式メディアや情報に決別できず、自分の過去のメディア意識や行動に確執するため、Erikson の発達課題の「絶望」を払拭する有益な情報にたどりつけない。しかし自分にとって本当に重要な情報をメディアから得る術を知れば、成熟された「英知」となり、自分の生涯を回顧し自己納得の上で、恐れることなく肯定的に死の受け入れ準備を行うことができる。これは、各発達段階で確立されてきた社会情動的スキルの最終的な「自信」であり、生涯を通じて「目標の達成」となる。

このように乳児期から老年期まで全ての人々が各段階の課題を体系的かつ継続的に遂行していくことで、最終的に生涯に渡る MIL 発達を成しえて、Media and Information Literate person となる。

(2) WS 実践の成果
第 2 段階における成果は、①「MIL 生涯発達理論」を元に各発達段階に則したワークショップを柔軟性に富んだデザインで、②コロナ禍においても融通性を重視して実践できた点である。
① 発達段階に適応できた WS のデザイン
実際の WS では、事前アンケートで調査した参加者の年代とメディア意識行動を鑑みて、各時期の MIL 発達段階で確立したい課題とスキルを Erikson の発達課題と社会情動的スキルに関連付けて設定していた。例えば、老年期の WS では脱テクノフォビアを目指し、1 回目で企画と撮影練習･2 回目で編集作業と発表を行い、シニア向けにアクティビティの時間配分を配慮した(写真 1・2 参照)。児童期の WS ではアクティビティでの対話場面を奨励し、自然な形でペアレンタルコントロールの契機になるようにガイドした (写真 3 参照)。いずれの WS も事後アンケートから動画の制作活動を通して葛藤・レジリエンス・達成感が明示され、テキストマイニングでは、MIL 基本概念の体験的実感に関する語彙が共起ネットワークに表出した。総体的な成果として、柔軟性に富んだ WS のデザインにより、実践した児童期・思春期・青年期・成人期・老人期については、「MIL 生涯発達理論」における MIL 発達課題の妥当性が示唆された。

写真 1 老年期 WS 1 回目

写真 2 老年期 WS 2 回目

写真 3 児童期 親子 WS

② フレキシブルに実践できた WS スタイル

研究期間中に Covid-19 が世界規模で発生し深刻化したため、当初対面形式で企画していた WS 実践は、延期を余儀なくされた。しかしコロナ禍の状況に応じて延べ 9 回、対面・オンライン・ハイブリッド（対象者がオンラインと対面の双方で参加するパターン・動画クリエイターがオンラインで参加し対象者とファシリテーターの大学生が対面で参加するパターン）での WS 実践を試みることができた（写真 4・5・6 参照）。結果的に「想定外の事象により得られた新たな知見」として、WS の実践スタイルの可能性が拡大され多様化につながった。

写真 4 対面（思春期 WS）

写真 5 オンライン（老年期 WS）

写真 6 ハイブリッド（児童期 WS）

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

理論構築では、2019 年に Sweden で行われた UNESCO Future Conference にて、「Constructing a Developmental Theory of Lifelong Media and Information Literacy. Based on Practical Research: Part I Theoretical Construction」を口頭発表した。世界初の「MIL 生涯発達理論」を欧州の国際会議で公開したことで、国外での認知が拡大した。

WS 実践では、2022 年 11 月に日本メディア学会秋季大会（オンライン）にて、『乳児期から老年期までの「メディア情報リテラシー生涯発達理論」の構築と実践研究』におけるワークショップ実践―思春期編を口頭発表した。国内で「MIL 生涯発達理論」を構築したこと、理論に基づく WS が実現したことを国内で開示できた。

また今までのメディア情報リテラシー研究と本研究で得られた知見をまとめた本『メディア発達心理学』を執筆中で、福村出版株式会社から 2025 年 3 月に刊行予定である。

(4) 今後の展望

WS については、コロナ禍の影響があったため全ての発達段階で実践することは叶わなかった。今後の課題として、発達段階ごとの WS 実践を継続しデータを蓄積し、「MIL 生涯発達理論」と WS の整合性を高めていきたい。

＜引用文献＞

① Erikson. (1959). *Identity and the life cycle.* International Universities Press.

② Komaya, M. (2020). Implementation of Media and Information Literacy Training Program for Women's University Students in Teacher Training Course in Japan. MILID Yearbook 2018/2019 Media and information literacy in critical times: Re-imagining learning and information environments. pp. 215-228, UNESCO Chair on Media and Information Literacy for Quality Journalism, Faculty of Communication Sciences, Autonomous University of Barcelona.

③ OECD. (2015). Education Working Papers. No. 121, p. 13. ベネッセ教育総合研究所(訳). 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成: 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆.

④ UNESCO. (2013). Global Media and Information Literacy Assessment Framework: Country Readiness and Competencies. p. 31.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 駒谷真美
２．発表標題 『乳児期から老年期までの「メディア情報リテラシー生涯発達理論」の構築と実践研究』におけるワークショップ実践―思春期編
３．学会等名 日本メディア学会　2022年度秋季研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mami KOMAYA
２．発表標題 Constructing a Developmental Theory of Lifelong Media and Information Literacy Based on Practical Research: Part I Theoretical Construction
３．学会等名 UNESCO Global Media and Information Literacy Week 2019 Feature Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 駒谷真美	４．発行年 2025年
２．出版社 福村出版株式会社	５．総ページ数 250
３．書名 メディア発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

駒谷メディアラボ（実践女子大学人間社会学科駒谷研究室ホームページ） https://www.komayalab.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	榊原　洋一 (SAKAKIHARA Youichi)		
研究協力者	押谷　由夫 (OSHITANI Yoshio)		
研究協力者	水越　伸 (MIZUKOSHI Shin)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関